

## 第19回

## 第3章 現代を生きる人間の倫理

## 社会契約説とは何か

## 今回学ぶこと

社会契約説の特徴を理解し、近代の市民社会がどのような原理で成立したのかについて学習する。特に、ホッブズの思想を通じて、個人と国家の関係について、ロックの思想を通じて、民主主義の原理について、ルソーの思想を通じて、人民主権と公共の福祉について考え、社会や国家における人間の自由や平等について考えを深める。



講師

小林和久

## ■■ ホッブズの思想 ～市民がつくる国家～ ■■

西洋では、近代の初頭、国王が絶対的権限をもつ絶対主義の政治が行われていた。この政治を支えていた王権神授説を打破し、近代市民社会を基礎づける思想となったのが社会契約説である。これは、自由で平等な個人が互いに契約を結んで国家や政治社会をつくったとする思想である。

その先駆者ホッブズは、人間を自己中心的な存在と考え、政治社会のない自然状態では「万人の万人に対する戦い」という弱肉強食の状態となり、自分の命を守るといふ、人間が生まれつきもっている自然権が保障されなくなる。それゆえ、社会契約によって自然権を守る強力な国家をつくり、個人はその国家に自然権を譲り渡さなくてはならない。そして、人びとは国家に絶対服従すべきであり、国家は『旧約聖書』に登場する最強の海獣「リヴァイアサン」のように、どんな抵抗も認めない絶対的な権力をもったものであるべきだと考えた。

## ■■ ロックの思想 ～民主主義の原理～ ■■

ホッブズの思想は結果的に絶対主義を正当化することになったが、同じイギリスの思想家ロックは、人間は本来、理性的な存在で、自然状態も、人びとがお互いに所有しているものを尊重しながら生活している比較的平和な状態と考えた。しかし、自分の権利を一層確実なものにするために、社会契約を行って権利の一部を政府に委ねる必要があると考えた。そして、国家や政府が市民の意志に反した場合には、市民は抵抗して

委ねた権利を取り戻すことができると考え、民主主義の原理となる思想を説いた。

このようなロックの思想は、1688年のイギリス名誉革命を支える理論となり、その後のアメリカ独立宣言やフランス人権宣言にも大きな影響を与えた。

### ■ ■ ルソーの思想 ～人民主権と公共の福祉～ ■ ■

フランスの思想家ルソーは、人間はもともとお互いを思いやる感情をもっていて、自然状態は完全に自由・平等で平和な理想的状態であるとみなした。しかし、私有財産による文明の発達、社会の不平等を招いたのだと考え、文明社会を批判する。そして、この不平等を克服するためには、人民一人一人が、自分の欲望だけを満たそうとする特殊意志をおさえて、公共の福祉を目指す一般意志に従って、社会をつくりなおすことが必要だと考えた。このとき、一般意志を行使するのは常に自分自身であり、選挙などで代表者を選んで任せることはできず、人民が直接政治に参加して意見を主張する直接民主主義の政治が必要だと考え、徹底した人民主権を説いた。

このようなルソーの思想は、特にフランス革命やフランス人権宣言に大きな影響を与えることになる。

#### ◆ コラム ◆

ホッブズは「無神論者」として、当時の社会から非難されたことがありました。また、ロックは『寛容論』という本を書いて、「国家は信仰に介入してはならない」と主張しますが、無神論に対しては強く批判します。

「無神論」と言っても、その意味は多様なものがありますが、伝統的なキリスト教社会では、“道徳心のない人”とか“教養がまったくない人”など、たいへん危険な人物と思われたそうです。現代でも、欧米の保守的な一部の地域や、一部のイスラームの国々などでは、そのように理解されてしまうこともあるようです。

今日のグローバル社会の中では、自分と宗教の関係を考えておくことも大切になってくるのではないのでしょうか。